

---

# 作り笑い

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

作り笑い

### 【Nコード】

N0842BA

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

宮廷の道化師ジュゼツペはいつもおどけた動作で人を笑わせている。彼は妻が死んだ時もそうだった。しかし実は、レオンカヴァーロのオペラ『道化師』等からヒントを得た作品です。

## 第一章

作り笑い

道化はいつも笑顔だ。このことについてだ。

宮中にいる道化であるジュゼツペはだ。こつ言つのだつた。

「当然ですよ」

「当然？」

「当然というのですか」

「道化は人を笑わせて楽しむのが仕事ですから」

だからだというのである。

「ですから化粧もです」

「そうした様になっているんですね」

「そうだったんですね」

「はい、そうです」

こつだ。彼はおどけた仕草をしながら同じく宮中に仕えている若いメイド達に話している。そうしてそのうえでこんなことも言つのだつた。

「ですから私もいつも笑顔なんですよ」

「そういうことですか」

「じゃあジュゼツペさんは何があってもですか」

「笑顔でいてそうして」

「私達も笑わせてくれるんですね」

「その通りですよ」

そしてだつた。そのうえでだつた。メイド達にこつ尋ねた。

「最近カトリー又さんの元気がないですね」

「ああ、あの娘ですね」

「あの娘のことですね」

「噂によれば失恋されたとか」

メイド達にこのことを尋ねた。それはその通りだつた。カトリー

又とは宮中にいるメイドの一人だ。その彼女がどうかというのだ。

「悪い男に騙されて」

「ええ、碌でもない奴でしたよ」

「本当に。それでそいつに金を貢がさせられて捨てられて」

「そうなたんですけれど」

「そういうことだったんですか」

そんなことを話してだった。ジュゼツペはこんなことも言った。

「ではですね」

「どうされるんですか？」

「それで一体」

「決まっています。私は道化ですから」

にこりと笑って。白塗りで目と口、そして鼻のところを強調している彼がだ。こんなことを言うのだった。

「あの娘も笑わせてきますね」

「そうして慰めるんですね」

「そうされるんですね」

「励ましは必要です」

こう言っただった。彼は実際にそのカトリーヌのところに行った。ふわふわとしたプロンドの可愛い娘である。しかしその目は泣き過ぎて真っ赤になり瞼も腫れてしまっていた。

その娘の前に来てだ。ジュゼツペは。

あらためてだった。早速だ。

おどけた動作で道化の演技をはじめた。それを見ていつてだ。

少しずつだがそれでもだ。笑みになっていく。まだ泣いているがそれでもだった。

笑顔になっていった。悲しみを忘れて。

それを見てだ。カトリーヌの同僚のメイド達は言うのだった。

「やっぱり凄いわよね」

「そうよね。やっぱりね」

「ジュゼツペさんの手にかかればどんな悲しいことも忘れられるわ

よね」

「道化の人だけはあるわ」

「ですから道化はです」

そのジユゼツペが彼女達に話す。やはりおどけた仕草をしきりに続けながら。

「人を笑わせることが仕事なのです」

「どんな悲しい思いをしている人でもですね」

「笑わせてそれを忘れさせる」

「それがですか」

「はい、仕事です」

今度は一礼して言う彼だった。その身体にぴっしりとした派手な色とカラー、フリルまで付いている如何にも道化といった格好でだ。

「そういうことなのです」

「ううん、やっぱり凄いですね」

「そうしたことができるなんて」

「それにジユゼツペさんって動き軽いですけれど」

メイドの一人がここでこんなことを言った。

「けれどあれですよ。宮廷に入って長いですよね」

「もうどれ位ですか？」

「私達が生まれる前からおられると聞いてますけれど」

「三十五年位でしょうか」

それ位ではないかとだ。ジユゼツペはおおよそだが答えた。

## 第二章

「十五の時に父の後を継いで、ですから」

「じゃあ五十ですか」

「五十歳でその動きなんですか」

「それも凄いですよ」

「そうでしょうか。これでも家に帰れば」

どうかというのである。彼の家に帰れば。

「もう息子も娘も結婚して古女房がいるだけのしがないおっさんですよ」

「いえ、しがないなんて」

「そんなことないですよ」

ジュゼツペは笑ってメイド達に返す。

「本当にね。化粧を落とせばですよ」

「ただのおじさんだっていうんですか」

「そうなんですね」

「はい、そうです」

その通りだというのである。

「家じゃ本当に女房に頭があがりませんから」

「けれどそう言う人って大抵奥さん大事にしますよ」

「そうですよ」

ここで言うのである。メイド達は。

「奥さんに頭が上がらない位がいいんじゃないですか？」

「私達はそう思いますけれど」

「ははは。そうかも知れませんか」

笑ってだ。ジュゼツペは彼女達の言葉に応えた。

「まあとにかくです。私もです」

「化粧を落とされたらですか」

「普通におじさんなんですね」

「そういうことです」

こんなことを話していた。そして実際にだ。彼は化粧を落とすと普通の顔に皺のある姿勢が少し悪くなっている痩せた初老の男だ。その彼が。

家に戻るとだ。彼とは逆にビア樽の様な女が出て来て出迎えてきた。

「お帰り」

「ああ、只今」

笑顔でだ。彼はその女に応えた。そして言うのだった。

「何もなかったかい？」

「あつたよ」

その女、ジュゼツペの女房であるカーチャは笑顔でこう彼に話す。

「市場に行ったらね」

「市場に行ったら何があつたんだよ」

「いいトマトに大蒜があつてね」

話は食べ物に関するものだった。

「それとマカロニもあつたんだよ」

「じゃあ今日はマカロニか」

「それと鰯だよ」

それもあるというのだ。

「鰯をオリーブで煮たからね」

「いいなあ、マカロニに鰯か」

「そうだよ、それじゃあワインと一緒にね」

「ああ、食おうな」

こんな話をしてだった。二人は家の中、質素だが奇麗に掃除されたその家の中に入ってだ。そうしてそのマカロニに鰯を食べながら話すのだった。

「美味しいな」

「そうだよ。いいトマトに大蒜だね」

「鰯もいいな」

その鯛にかぶりつきながらの話だった。

「これも中々」

「実はスパゲティもあつたんだよ」

「ああ、あれもか」

「あれにしようかっても思ったけれどね」

カーチャは笑いながら話す。木のスプーンでマカロニを口の中に  
入れながら。

「前に食べたよね」

「食つたな。チーズをまぶしてな」

そうして手で掴んで上に掲げてから食べる。この時代のスパゲテ  
イの食べ方だ。

それをして食べたというのだ。二人で。だからだというのだ。



### 第三章

「だから止めたんだよ」

「そうだったのか」

「ああ。それでマカロニしたんだよ」

「こうしてトマトに大蒜でか」

細かく刻んだその二つをソースにしてだ、マカロニがある。勿論そこにもオリーブが使われその油と香りを自己主張している。

「いいな、これも」

「やっぱりパスタだよ」

「そうだよ。パスタだよ」

まさにパスタ好きの言葉だった。

「パスタがないとね。スープもいいけれどな」

「そうだよ。あとパンもチーズもあるしね」

その二つもちやんとあった。

「どんどん食べようね」

「ああ。それにしてもな」

「今度は何だい？」

カーチャは笑顔で夫の話の話を聞く。今度はパンを食べながら。

「御前の飯ってやっぱり美味しいな」

「おやおや。褒めたって何も出ないよ」

「世辞じゃないさ」

笑ってだ。それは否定するジュゼツペだった。

「本当に美味いからな」

「だからたらふく食べられるんだね」

「二人で食わなくてどうするんだよ」

「こうも言う彼だった。」

「折角夫婦になったんだからな」

「そう言ってもう三十年だね」

「まだ三十年だな」

「言うね。じゃあこれからもね」

カーチャも笑顔になってだ。それでジュゼッペに話す。

「二人でこうして食べていこうね」

「子供達も出て行つたしこれからは二人でな」

「こうしていこうね」

家に帰るといつも女房と笑顔でいつも一緒にいる彼だった。彼は自分の女房を愛していた。まさに恋女房だった。しかしだった。

その幸せは突然終わつた。何とだ。

今日も宮廷で皆を笑わせ楽しませていたジュゼッペのところだ。メイドの一人が慌てて来てだ。そのうえでこう告げたのである。

「あの、奥さんが」

「んっ、何かあつたのかい？」

「馬車に跳ねられて」

どうなつたかとかだ。メイドは肩で息をしながら彼に話す。

「それでもう」

「馬鹿な、そんな筈がないよ」

どういふことかだ。彼はすぐに察してだ。そのことを否定しようとした。

「カーチャはそんな」

「あの、すぐにお家にです」

「家に」

「はい、帰られて下さい」

「馬鹿な、そんな筈がないから」

とにかくだ。ジュゼッペはそのメイドの話を心の中だけでなく言葉でも否定してだ。そのうえで慌てて自分の家に戻つた。そしてそこにいたのは。

眠っている女房だった。ベッドの中に置かれている。それを見てだ。

彼はがっくりと肩を落とした。それで充分だった。近所の面々は

その彼に対して何とか慰めの言葉をかけた。

「とりあえず落ち着いて」

「気を取り直してね」

「全部わし等に任せて」

「ジユゼツペさんは静かにしててね」

「いえ、大丈夫ですよ」

しかしだった。彼はすぐに落としていた肩を元に戻して。

そしてそのうえでだ。こう言ったのである。

「いえ、お気遣いなく」

「お気遣いなくって」

「大丈夫なのかい？」

「奥さんがその」

「こうしたことになっても」

「はい、大丈夫です」

笑顔を向けてだ。こうも言ったのである。

## 第四章

「だからですね」

「だから？」

「だからっていうと？」

「私もやりますから」

こう言っただった。彼もだ。

あらゆることをした。そうしてその日は終わらせた。そして次の日だった。

この日も仕事だった。彼は朝になるとすぐに家を出て王宮に向かうとする。その彼に近所の者達は心配する顔で声をかけた。

「今日位休んでもいいんじゃないのかい？」

「そうだよ。あんなことがあつた次の日だし」

「今日はせめて家でゆっくり休んで」

「そうしてもいいんじゃないかい？」

「私の仕事で皆さん笑ってもらえるので」

しかしだった。ジュゼツペはその彼等ににこりと笑ってこう言っ  
てみせたのである。

そしてだ。彼等にだ。彼はこんなことも言った。

「ですから道化としてです」

「行かれるんですか」

「お仕事に」

「はい、そうします」

笑顔はそのままだった。

「それでは今から」

「そうですね。それじゃあ」

「頑張ってきてくれよ」

「今日もな」

「はい、それでは」

こう話してだった。彼は宮廷に出て着替えて化粧に入る。だが宮廷でもこのことは知られる様になっていてだ。メイド達も心配する顔で話す。

「ジュゼツペさんだけれど」

「そうよね。奥さんお亡くなりになられたけれど」

「物凄い愛妻家だったんでしょ？それじゃあ」

「大丈夫かしら」

こうだ。彼について心から心配していた。

そのうえでだ。彼女達も言うのだった。

「せめて暫くの間ね」

「そうよね。お仕事休まれたらいいのに」

「とてもお辛いだろうに」

「それでお仕事なんて」

「無理されてるんじゃないかしら」

彼女達はこう考えていた。しかしだ。

化粧も整えたジュゼツペはだ。にこりとしてひょうきんな動作をしていた。いつもの彼だった。その彼がメイド達に話すのであった。

「さあ、今日も頑張りましょう」

「あの、ジュゼツペさん」

「本当に大丈夫ですか？」

「本当に暫くの間でも」

「御一人で」

「大丈夫ですよ」

にこにこしながら言うジュゼツペだった。それは化粧だけのものではなかった。

「ですから今日も」

「そうですね。そう仰るのなら」

「私達はいいですけれど」

「それじゃあですよ」

「くれぐれも無理はなさらずに」

「無理なんてしていませんよ」

またこう言うジュゼッペだった。そうしてだった。

彼はこの日も笑顔になりだ。そのうえで道化の仕事をした。そのうえで宮廷の者達を笑顔にさせていく。メイド達はそんな彼を見て安心した。

しかしその彼を見てだ。宮廷の主である王はこう周りに言った。

## 第五章

「道化に特別に報酬を与えてくれ」

「道化に？」

「道化にですか」

「そうだ。そうしてくれ」

こう周りに言ったのである。

「わかったな」

「あの、しかし道化はです」

「ああしていつも通りですが」

「細君が亡くなってもです」

「それでも」

「いや、泣いている」

それを察しての言葉だった。

「だからだ。与えてくれ」

「泣いていますか？道化は今」

「笑っている感じですが」

「それが違うのでしょうか」

「いつも通りに見えますが」

「見せていないだけだ」

王の目が遠くを見るものになっていた。道化を見ながらもだ。

「しかし素顔では泣いているのだ」

「化粧の下の顔も笑っていますが」

「それでもですか」

「泣いているものを見せない者もいる」

これが王の言葉だった。

「それが道化なのだ」

「そうなのですか」

「道化は」

これは周りにはわからないことだった。しかし王は確かに彼にそれを渡した。彼のことを察したからこそ。あえてそうしたのである。ジューゼツペは夜になり仕事を終えて家に帰った。家はもう一人だった。

自分で料理、あのマカロニと鯛の料理を作った。彼も料理ができたのだ。

それを作って一人でテーブルに座って食べる。そうしてから気付いた。

「作り過ぎたな」

妻の分まで作ってしまったことにだ。作ってから気付いたのである。

それも食べてからだった。一人でだ。彼は泣いた。

家の中に誰もいないことを確認してから一人泣いた。そうしたのである。

だが次の日には。もうだった。

笑顔で宮廷に行きそうしてだ。また道化になっていた。その明るい顔でメイド達に話す。

「今日とはびきりの芸をお見せしますよ」

「とびきりの？」

「どんな芸ですか？」

「皆さんが驚かれる様なものです」

そうした芸だというのである。

「後でのお楽しみです」

「ううん、何かよくわからないですけどね」

「それでも凄いなだね」

「びっくりするようなものですね」

「はい、それをお見せします」

いつものにこりとした顔での言葉であった。

「ですから。御期待下さい」

「はい、じゃあ御願いますね」



「どういったのか見せてもらいます」

「楽しみにさせてもらいます」

「それでは後程」

道化のおどけた仕草で恭しく一礼する彼だった。そうして後で実際に。彼は身軽な芸をこれでもかと思わせてメイド達も王もその周りの者達も驚かせたのである。笑顔のままで。彼はそれから最後まで笑顔だった。悲しい顔を見た者はいない、誰もがそう言った。

作り笑い 完

2011・9・2

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0842ba/>

---

作り笑い

2012年1月1日23時49分発行